

シニア・ケミカルエンジニアの活躍の場を作る

(SCE・Net) ○(正) 小林 浩之*

1. SCE・Netをとりまく背景

増え続ける高齢者(65歳以上)が、いかに生きていくかは、勿論我々の問題であるし、その真ん中に我われはいる。

現在(2011年)の65歳以上の高齢者は23%、2025年には30%、2035年には33%になると想定され、同時に労働者(15~64歳)人口は現在(2011年)64%が2035年には57%になり、現在の8,135万人から6,300万人になるように推計されている。世に言う少子高齢化、人口減少である。部分的には、対処もされていると思うが、この避けることのできない前提を俯瞰し、進路指針にいたるような哲学も政治も経済も技術もビジョンが示されているようには見えない。日本のアクティビティを維持するためには、ダイナミックな移民などの導入もありうるとしても、高齢者層への訴求は大きくなり、同時に、所謂、勝ち逃げも許されないことになる。もはや想像ではなく現実である。しかしながら、高齢者には、体力、知力の限界も大きいことから生産年齢層を、等価で置き換えることはありえないし、それどころか、高齢者は、生産年齢層の負担にならないというせめてもの努力も一層、求められている。加齢とともに当然能力も落ちる。だから、高齢者の力を最大限発揮させるためには、比較的若い人との連携が必須の条件である。比較的若い世代と連携もしながらも、自立し、社会に貢献し、自らの生きがいと気高さを担保できる環境と場を創設することは社会の義務とも言える。

化学工学会 産学官連携センターの中にSCE・Netという企業のOBを主にした組織が設置されたのは13年前のことである。SCE・Netの活動理念は、社会貢献と自己発現である。現在のところ、SCE・Net自身には、学からの参加が殆どないが、間口はもともと広いので、これまで学が優勢な学会の中にあって、新たな意味での産学官の連携の場を実現できると考えている。SCE・Net自身は新しい知識やスキルは苦手かもしれないが、全体を俯瞰することも、システムを最適に動かすことにも鍛え抜かれた自信がある。ほっておけば老害となることも、新しい知恵と組み合わせると、卓越した付加価値の大きな知恵にもなる。学会の場に、さらに世代を超え、産を超え、学を超え、官を超え新しい舞台を構築することが出来る。一方、SCE・Netを構成するメンバーの年齢の幅や価値観の幅は広いから、戦いを終えようとしている人たちのくつろぎの場でもありたいと思っている。

2. SCE・Netの活動の現状

全てが、そこまで到達するにはまだ距離があるが、現状を、少し説明してみたい。

SCE・Netの活動理念は、前述したように、

“社会貢献と自己発現”を会員相互の自発的貢献によって

成し遂げることである。

それらを実現化するためのSCE・Netの行動指針は

- ・ 糧を得る活動の場を作り、参加し、活動する
- ・ 外に向かって発信できる活動の場を作り、参加し、社会へ発信する
- ・ 会員が親しく、交流できる場を作り参加する。

であり、それに沿うべく行動している。

具体的には

外に向かって

- (1) 企業や団体からの依頼(主に有償)に応じて、技術や経営の指導、講演、教育、調査などを受託し、外部の要請に応える。
- (2) 社会人向け公開講座を開催し、講師を担当する。
- (3) 電子媒体も含めて、出版、寄稿などを通じて、経験や研究の成果を発信する。
- (4) 化学工学会行事や活動に参加する。
 - ・ インケム産学官マッチングフォーラムにおけるチェアを担当する。
 - ・ 化学工学年会 産業技術フォーラムの一部に参加、主催する。
 - ・ 産学官連携センター内の各委員会と連携する
 - ・ 関東支部と連携する。

内では

- (1) 安全、教育、装置材料、環境、エネルギーなどの研究会での相互研鑽を図り、この研究成果を、外部に対する活動に繋いでいく。
- (2) 技術懇談会を開催し、講師としても、受講者としても参加する。
会員講師、外部講師などによる専門的な講演会に参加し、広い知識の吸収の機会を得るとともに、会員および外部講師も含めた広い交流を図る。
- (3) 交流会を開催し、参加する。
年数回会員親睦のため、見学会などの開催し、会員相互の親睦を図る。

などである。

私達SCE・Netは、主には、化学工学や化学を基盤にした化学品や鉄やセメント関係の企業や、そのための設備を提供してきた企業のOBやアカデミアのOBの集まりである。そのようなOBの退職後のライフ・モデルの一つをこの化学工学会の場の中に、作り上げたいと考えている。

同時に、小宮山宏氏がプラチナ社会の中で、訴えておられる老人学の言う「幸せな加齢の5条件」のうち、“Interaction”、“Openness to new concept”、“Positive thinking”の3条件に向けて練磨する有力な環境と場を提供できると考え

ている。

SCE・Net の活動は、少子高齢化時代に向けて学会が作る場の一つの始まりに過ぎない。これを超える、さらに広い活躍の場が展開されることを期待している。

これは今の高齢者の課題であるばかりでなく、現役を含めた化学工学会、広くは社会システムの問題である。

3. シニア・ケミカルエンジニアの活躍の場の充実

化学工学会の活動指針である“Vision 2023”によれば、「少子高齢化が進む中、今後の化学工学を支える人材を育成・活用するためには男女、国籍、年齢の壁を取り払うダイバーシティの充実が不可欠である。」とある。

老人学で指摘する「幸せな加齢の5条件」は高齢者が陥り、属性ともいふべき、殻を閉じがちな隘路の裏返しと言える。

産学官連携センターの中でSCE・Netに限ったことではないが、産にせよ学にせよ連携の中核として、その経験と力を発揮することが求められている。

つまり、私達の目指したいのは、言うなら「グレーターSCE・Net」であり、これに向けて進もうとしている。

(1) 化学工学会の産学官連携センター内、委員会や関東支部や大学との連携

技術交流会の相互乗り入れ

化学工学基礎入門講座の開設((関東支部と連携)

ケミカルエンジニアリング・カフェ(工学院大学での試行)

(2) シニア会員制度の提案

(3) SCE・Netの会員資格と会費制度の改訂(よりオープンに、入会障壁を下げる)

(4) 法人会員に賛助会員制度の設置(お試しとバリアの低減)

(5) 外部への発信と共働

中国系企業向け情報サービス

CSR、環境報告書の研究

などはすでに、実現もしくは実現しようとしているものであるが、このようなことでも、共に参画し、より大きな成果をとるという見方からすると不十分である。

今後、進めて行きたいのは、

(6) 真に、バリアを取り払った活動で同じ舞台の違う場所で役目をはたし、タンジブルで大きな成果を得るようなプロジェクトへの参画である。

そこでの学会が解決すべき課題は、

1) どこに誰が、どのように、その部隊を作り、誰が指揮をとるのか、その仕組みが充分とはいえないこと。広い視野からプロジェクトに参加できるシステムが必要である。

2) シニアが直面している問題は現役世代との協業のなかで、経済的なファンダメンタルとして当然業務とボランティア業務の違いに直面することである。このことは諸刃の剣的問題でもあるが、この面ではサポートと配慮をお願いしたいところでもある。

3) SCE・Net は、比較的制約なく、社会と対峙できる組織である。SCE・NetがSCE・Netでなくなることもあるが、会員のバリアをなくし、老若男女、産学官が自由に入出入りする組織であっても良い。

4. まとめ

(1) これまでの SCE・Net の活動はその先見性とあわせて、学会においても、社会においても、一定の評価をしても良いし、されるだろう。

(2) 少子高齢化の進む今後は、好むと好まざるにかかわらず、有償、無償にしろ、シニア・ケミカルエンジニアの社会への貢献は一層、求められていくことになる。これまで、ある意味でシニア・ケミカルエンジニアの自己満足であったり、受益者側にとっても補完として受けとったりすることもあったが、社会に意味ある成果を得るための一連のワークフローの中で、部分的であっても、必須な要素を担うことになる。

(3) たとえば、事業開発であれ、技術開発であれ、多くの機能を有機的に結集して遂行できるプラットフォームやステージをつくり、シニア・ケミカルエンジニアが一定の役割をになうことやそのことを通じて、高齢者の経験や知識をオープンなものとする必要がある。学会としても、そのことを担うべきである。

*E-mail:hirokyuki-hule@mug.biglobe.ne.jp